加賀藩士堀越左源次の家集について

綿抜豊昭

はじめに

加賀藩関係者には狂歌（俳諧歌）を嗜む者がいたが、まとまった家集が伝わる者は少ない。堀越左源次は、その数少ない一人であり、四〇〇首余りの詠歌が伝わる。後述するように十一の家集の写本が現存することから、近世の加賀の狂歌の歴史において看過できぬ存在と考えられる。左源次については、はやくに日置謙『改訂増補加能郷土辞彙』（昭和三十一年八月、北国新聞社）に以下のごとく記されている。

藩の御壁塗を職とした。多芸にして緒占の彫刻を為し、茶道に親しみ、又奇智に富みて、狂歌を好み阿北斎雀翁と号した。文化七年八月十六日歿、享年六十四。法諡本成院珣雄日光居士。遺稿に阿北斎狂歌・陀楽斎独吟・治哉治哉無邪集がある。

その後、中屋隆秀氏によって次のものが著された。

①「『加賀の狂歌師堀越左源次（阿北斎・雀翁）とその一族』」（『石川郷土史学会々誌　第39号』平成18年12月）

②「『加賀の狂歌師堀越左源次とその一族』（その二）」（『石川郷土史学会々誌　第40号』平成19年12月）

③「資料『加賀の狂歌師堀越左源次（阿北斎・雀翁）とその一族』（3）」（『石川郷土史学会々誌　第45号』平成24年12月）

＊便宜上、以下、本稿で「中屋①」と記した場合、右の①をさす。

中屋氏稿は、堀越家の系図が示され、堀越左源次（阿北斎・雀翁）の狂歌の約一七〇首が分類・翻刻され、また関連資料が紹介されている。基礎研究として看過できぬものといえよう。

中屋氏は

堀越左源次は、加賀藩の御壁塗を代々務める堀越家に生まれた。多芸にして諸占の彫刻を為し、茶道に親しみ、又奇智に富みて、狂歌を好み阿北斎雀翁と号した。文化七年（一八一〇）八月十六日没す。享年六十四。菩提寺の本光寺（金沢市東山二丁目十九番四十三号）に葬る。法名は本成院珣雄日光居士。

と、『改訂増補加能郷土辞彙』をふまえて、堀越左源次について述べられている（中屋①一二一頁）。なお、中屋①で示された「堀越氏（三

家）の略系図」では、「文政七年八月十六日六十四歳土葬」とあり（一二二頁）、没年が異なる。後に述べるように、文化八年の作があることから文政七年（一八二四）没が正しいと考えられる。

また以下のようにも述べられている（一二一頁）。

堀越左源次　号は阿北斎歌・五足斎圓明・陀楽斎・雀翁。具足師の練甲の門人から「雀翁」、自身の門人や藩士の津田政隣からは「阿北先生」と呼ばれている。狂歌の師は練甲か。

以上のように伝記的な面については基本的な事が明らかにされているが、「狂歌作者」としての視点から見る場合、根本資料となるその家集については、中屋氏稿には若干補われるべきものがあると考えられる。特に最終的に一三〇首にまとめられたと考えられる家集について中屋氏は述べられていない。しかし、加賀藩士に流布したものとして注目すべきかと思われる。そこで、この流布した家集について本稿で述べることにしたい。

一

堀越左源次の家集について、中屋隆秀氏は以下のように述べられる（中屋①一二一頁）。

前田貞醇の所持写本『阿北斎独吟・邪々無邪集』加陽金府住・無手勝鉄皮と『堀越狂歌集』（津田政隣の編著『政隣記』第廿四・廿七編より抜き出し、まとめられたもの）が、金沢市玉川図書館近世史料室に所蔵されている。

また「左源次（阿北斎雀翁）歌集の成立」として、次のようにも述べられる（中屋①一二四頁）。

『政隣記』　　『堀越狂歌集』
文化四年（一八〇七）　　前田家編輯方所用
第二十四編・十二月記中
九十二丁裏から九十四丁裏まで　→一丁表から七丁裏まで
文化七年（一八一〇）
第二十七編・六月記中
七十五丁表から八十六丁裏まで　→八丁表から四十三丁裏まで
同・十二月記中
二百四十丁裏から二百四十六丁裏まで→四十四丁表から五十六丁裏まで

堀越左源次（阿北斎）は自ら歌集を残すこともなく、没後に門人達によって『阿北先生歌集』として編纂される。

また、人づてに写本が繰り返され、改訂本の『堀川二百五十首』（藤本純吉の旧蔵）が生まれた。

中屋氏は、金沢市玉川図書館近世史料室（現・金沢市玉川図書館近世史料館。便宜上、以下、「近世史料館」と称す）に、『阿北斎独吟・邪々無邪集』と『堀越狂歌集』が所蔵されるとするが、『阿北先生歌集』の所蔵者等については記されず、『堀川二百五十首』は藤本純吉の旧蔵とされるのみである。『阿北先生歌集』の所蔵者は不明だが、『堀川二百五十首』については近世史料館の藤本文庫に所蔵されている。

堀越左源次の家集を所蔵する公的機関は、管見に入るところでは、近世史料館のみで、同館には十一の写本が所蔵されている（ただし

資料として収録されたものが石川県立図書館森田文庫にある)。堀越左源次を狂歌作者として見る場合、その詠作の基礎資料となる家集の諸本については整理しておく必要があろう。そこで、まずこの十一本の書誌等について簡略ながら述べておきたい。

1. 堀越左源次狂歌集　整理番号　特16.91/97
白茶色の表紙(23.5×17.0㎝)、袋綴、一冊、全58丁。外題「堀越狂歌集　単」(題簽)。内題「堀越左源次狂歌集」。中屋氏のいう『堀越狂歌集』か。

2. 邪々無邪集　整理番号　特16.91/103
仮表紙(23.0×16.3㎝)、袋綴、一冊、全17丁。外題「阿北斎独吟邪々無邪集」(打ち付け書)。内題なし。中屋氏のいう『阿北斎独吟・邪々無邪集』か。表紙には

雨降月吉旦から衣
阿北斎独吟　「前田貞醇　借上」(貼紙・朱書)
邪々無邪集
加陽金府住
無手勝骸皮

と墨書がある。中屋氏は「加陽金府住・無手勝鉄皮」とするが、「鉄」ではなく「骸」と考えられる。

3. 阿北斎狂歌　四季混雑　整理番号　特21.9/400
深緑色の表紙(23.0×16.0㎝)、袋綴、一冊、全46丁。外題なし。内題「前集　阿北斎狂歌　四季混雑」。

4. 阿北斎狂歌　整理番号　K911/123
刷毛表紙(11.6×17.0㎝)、袋綴、一冊、全50丁。外題「阿北斎狂歌」(題簽)。内題「阿北斎狂歌　四季混雑」(扉)。

5. 阿北斎狂歌　整理番号　K911/123ア
紫色の表紙(25.4×17.6㎝)、袋綴、一冊、全51丁。外題「阿北斎雀翁　興歌集」(題簽)。内題「阿北斎雀翁　興歌集」(扉題)、「邪々無邪集」(巻首題)。

6. 堀越左源次狂歌　整理番号　K9/362
仮表紙(24.5×17.3㎝)、袋綴、一冊、全18丁。外題「堀越左源次狂歌」(打ち付け書)。内題なし。表紙に以下のようにある。

文化四卯年作
堀越左源次狂歌
津田近義

「津田近義」による写しであると考えられる。

7. 邪々無邪集　整理番号　K911/298
仮表紙(17.0×11.8㎝)、袋綴、一冊、全16丁。外題「阿北斎独吟邪々無邪集」(打ち付け書)。内題「邪々無邪集」(尾題)。表紙に以下のようにある。

天保三辰　六月中旬写之
阿北斎独吟
邪々無邪集
耕雲堂　[(難読・「書記」か)]

左源次没して九年後の写本である。

8. 阿北斎独吟　整理番号　K911/384
薄海老茶色の表紙(23.4×17.1㎝)、袋綴、一冊、全32丁。外題「阿

北斎独吟　四季混雑上」（題簽）。内題なし。後見返しに「篠田所持」とある。

9．左源次狂歌集　　整理番号　K911/150

青色の表紙（22.7 × 16.3㎝）、袋綴、一冊、全18丁。外題「左源次狂歌集」（題簽）。内題「堀越左源次狂歌　全」（扉）。明治四十三年三月付けの杜鵑花園準夫（藤井準夫）による識語、昭和二十九年付けの殿田良作の識語あり。殿田良作寄贈本。「左源次狂歌集」の後に「小笠原山城守長頼書捨」を付す。

10．堀川二百五十首　　整理番号　096.0/220

薄黄色の表紙（24.3 × 18.0㎝）、袋綴、一冊、全26丁。外題「堀川二百五十首」（題簽）。内題「阿北斎独吟　堀川二百五十首　四季混雑」（扉）。中屋氏のいう『堀川二百五十首』か。

11．頭のじゃじゃむじゃ　　整理番号　K911/152

薄茶色の表紙（22.7 × 15.8㎝）、袋綴、一冊、全21丁。外題「頭廼邪々無邪」（題簽）。内題「阿北斎独吟　頭のしゃ〳〵むちゃ」（扉）。殿田良作寄贈。

二

堀越左源次の家集の成立に関して、まず注目されるのは「9．左源次狂歌集」と考えられる。これは七十三首を収録し、序文は以下のようにある。

万のたからかき納めあまりし筆にじや
〳〵むぢやを集てみせよといふ人有にかけ
とも〳〵尽ぬ言の葉久しき夜々の詠ニも
ならんものならし
卯の耳の長きとしの初

成立年は記されていないが、『政隣記』（後掲）からして、「卯の耳の長きとし」は「卯年」すなわち文化四年（一八〇七）と考えられる。とすれば、文化四年の初めに編まれたことになる。ただし「9．左源次狂歌集」は巻末に本文と同筆で「右ハ堀越左源次といふ人の作也」とあり、自筆本ではなく転写本である。

右の序文に「じゃじゃむぢゃを集め」といっていることがわかる。前田貞醇が借り上げた写本の書名は「邪々無邪集」とあるが、それは右の序文に「じゃじゃむぢゃを集め」とあることに由来するものであろう（注1）。なお「11．頭のじゃじゃむじゃ」は、「頭の」と説明的な題になっている。詠作に対してではなく、作者の頭を「邪々無邪」としたのであろうが、他にこれを題とする伝本がなく、「9．左源次狂歌集」の序文からして「邪々無邪を集めた詠歌」ととらえておくべきであろう。

また「9．左源次狂歌集」の跋文は、以下のようにある。

千秋万歳楽
三十字ひともしハ八百屋よろつのかみさまや
自身のかんせしむるのみある人の求に
よりて書尽すなり

右の跋文は、後で述べるように、後に序文に用いられる。

中屋氏は「堀越左源次（阿北斎）は自ら歌集を残すこともなく」（前掲）と述べられる。「自ら歌集を残すこと」が「自選家集の編纂」の意であるならば、堀越左源次が序文で「求めに応じて書き集めた」

とするのだから、自ら家集を編んでいた、といえよう。

三

次に注目すべきは、中屋①にとりあげられた加賀藩士津田政隣が編んだ『政隣記』（近世史料館所蔵）であろう。これに堀越左源次の家集が写されている。まず文化四年十二月の箇所に以下のようにある。

御壁塗堀越（傍注・宅堀川町）左源次者万端ニ器用之性質別而／武器翫器共細工ニ妙手也好て狂歌を／読む左之狂歌今年之作なる由任一覧記之／

味噌ひともしは八百屋万つのかみ様より自身の／感せしむるもいとおかしある人の求によつて書／集久しき夜〳〵の詠ともならんかし／

卯の年の長き月日五足斎圓明判

とあり、以下五十五首が収録されている。「9．左源次狂歌集」の跋文が序文に用いられている。『政隣記』文化四年（干支は「丁卯」）の記事であり、それに「今年之作」とあり、序文に「卯の年の長き月日」とあることから、文化四年九月に編纂されたものと考えられる。「9．左源次狂歌集」が年頭に編まれたとすれば、これはその次に編まれたものとなる。

また「今年之作」は、文化四年に詠まれたものを集めた、という意ではなく、この家集が今年編まれたという意である。なぜなら収録された歌の中に以下のものがある。

寅の年暮にふら〳〵煩ふ人に

寸白やしやくやせんきの藪医者も近頃しまひし寅の年の尾

とあり、「暮」とはいえ「寅の年」の作である。

文化四年に『政隣記』に写されたものは、後で述べるように、津田政隣が、ある人が所持した写本を借りて写したものである。収録歌を取捨選択したとはないので、借りた写本をそのまま写したものと考えられる。元の所蔵者自身が取捨選択した、あるいは元の所蔵者が入手したものが取捨選択されたものであった可能性は考えられるが、それを証する資料が発見されるまでは、文化四年に『政隣記』に写されたものを、再編本とすべきかと思われる。

同系統のものとして次に「6．堀越左源次狂歌」があげられる。九十九首を収録し、序文は『政隣記』と同じである。

同じく同系統のものとして「7．邪々無邪集」があげられる。一四首を収録するが、序文は以下のように少々異なる。

三十ひともしは八百や万の神さま
たちや自身もかんしまし
ますとやあるひと筆しみせ
よと有るに筆をとり侍る

ことし吉月日　　五足斎　圓明

「卯の年の長き月日」が「ことし吉月日」と曖昧になっている。

こうした系統で、最終のものが「2．邪々無邪集」である。中屋①でとりあげられた「前田貞醇の所持写本『阿北斎独吟・邪々無邪集』」と考えられる。これには一三〇首が収録されている。この序文は以下のようにある。

三十ひともしハ八百屋よろつのかみ様

たちや自身も感しましますとや
ある人写し見せよと有るに筆とり侍る
　　ことし吉月日　　五足斎　圓明

以上とりあげた写本で、どの歌がどれにどのような順で収録され、どれに収録されていないか、の詳細についてはあらためて述べる予定であるが、次のような成立過程であったと考えている。

1　依頼による七〇首余りの家集　　→「9．左源次狂歌集」
2　1から二〇首余り削除された家集　　→『政隣記』所載
3　2に増補された家集　　→「6．堀越左源次狂歌」
4　3をもとに一三〇首収録した家集　　→「2．邪々無邪集」

なお右の「4」に、他者によって「追加」がなされたものが「5．阿北斎狂歌」である。「追加」の前に以下のようにある。

右ハ堀越左源寺先生阿北斎子
の読れし興歌なり予川崎
某より読ふて写置もの也又
左に記せし物予多年人のはな
されしを仮に禄し置しもの
有しか若反古にもならん事を
惜み今幸に爰に記しぬ

右の「川崎某」所蔵本については所在不明である。この川崎本がそうであったのか、転写のおりに間違えたのか不明だが、重複したものがあるなど、若干問題がある。「追加」には堀越左源次だけでなく、蜀山人などの詠歌も含まれる。

四

先に述べたものが、本稿「はじめに」に述べた流布した家集である。これは、取捨選択・削除・増補などがなされたと考えられ、自選集的な家集であるといえよう。これに対して、いわば全集的な家集も編まれている。この家集についてもふれておきたい。

全集的な家集としては、まず「8．阿北斎独吟」があげられる。序文は以下のようにある。

三そひともしハ八百屋
万屋のかみ様心を
すゝしめ自身のかんせしむ
るのみなりは若子の
見給ふものにあらす
下女やはしたや権内か
われをわすれておかし
かりへそをかゝへて
くわはら〳〵

また、巻末には以下のようにある。

和歌に似た夷曲あり狂歌に
似た歌あり合点のゆかぬ歌あり
予かうたは只自身ひとりの楽にて
時のはやり風もいとはす生れ

つきの一流人ましはりもならはこそ
せむとおもふこゝろも
なし口の明たまゝならし

序跋を整え、二二六首をおさめる。

最も注目すべきは「3．阿北斎狂歌　四季混雑」であろう。序文は以下のようにある。

三十ひともしハ八百や
よろつの神さまや
自分もかんし
ましますとや
あるひと写し
見せよと有ニ筆
を取侍る
今年吉月吉日　阿北斎　雀翁　［方印・勃々庵］

自筆本と考えてよいかと思われる（注2）。二七七首をおさめている。

『政隣記』（文化七年六月）に以下のようにある。

前文化四年十二月に記す堀越左源次狂歌ハ或人の写［虫損・「せる」カ］／を借て書置ける処此度左源次より本書をかりて合せ／見るに先書と誤多きゆへ添削して直し其後の詠／歌左に写し序文ハ余程の違ゆへ是又左ニ再書す

阿北斎独吟狂歌
三十ひともしは八百屋万つのかみさまたちや自身も
かむしましますとや有人のうつし見せよと有に
筆を取て侍る
ことし吉月日　五足斎　圓明

この後に約二六〇首が記されている。注目されるのは、「左源次より本書をかりて」とあることである。「3．阿北斎狂歌」とは「序文の署名」が異なる。津田政隣が借りたのは「3．阿北斎狂歌」ではあるまい。

なお『政隣記』に関しては、文化七年十二月の箇所に、左源次の百首詠が載る。最後に

此次文化八年阿北先生狂歌集と題して別冊ニ出す

とある。また百首の中に以下のものがある。

辛未の春開口
四方山は挽茶の色に春霞まつたち初るけさの大ふく

右の「辛未」は文化八年のことであろうから、この百首は、後にここに挿入されたものと考えられる。なお「阿北先生狂歌集」と題された「別冊」については不明である。中屋①で述べられた「阿北先生狂歌集」については、『政隣記』の記述によるものか。

また中屋①で述べられているように、『政隣記』に収録されたものは、のちにまとめられた。「1．堀越左源次狂歌集」がそれにあたる。

おわりに

これまで述べてきたことをまとめると、堀越左源次の家集には、選集というべき家集と全集というべき家集がある。流布したのは前者である。これは、増補などを経て、最終的に一三〇首にまとめられた。またこの家集収録歌を含む全集的な家集も編まれた。これは

自筆と考えられるものが残っている。

堀越左源次の作風は、地口を中心としたものであり、文芸としてすぐれているかは疑問である。しかし日常生活で多く成されたものだけに、当時の文化をうかがい知る貴重な資料といえる。

文化資料となる詠歌については、その大半が中屋①にすでに翻刻紹介されている。今後は、当時の狂歌作者らの教養がどの程度で、どのような作風であったかの分析が必要かと思われる。次に「2. 邪々無邪集」「3. 阿北斎狂歌　四季混雑」の翻刻・注釈がなされることがのぞまれる。

【注】

1　だいなしになるさまを「しゃしゃむしゃ」と加賀方言でいう。

2　「勃々庵」は左源次の子息が称した「庵号」とされるが、この印があることから、その庵号は父から子へ継承されたものと知られる。

[付記] 本稿をなすにあたり、貴重な資料の閲覧をご許可いただきました金沢市玉川図書館近世史料館、石川県立図書館にあつく御礼申し上げます。

（わたぬき　とよあき　中央大学文学部兼任講師）